

新・平家物語

第八卷

新・平家物語 第八卷 (全十二卷)

定 価 三五〇円

昭和三八年三月五日第一刷発行

著 者 吉川英治

発行者 伴 俊彦

印刷所 大日本印刷株式会社

発 行 所 東京小倉
大阪名古屋 朝日新聞社

© 吉川英治 一九六三年

第八卷目次

京乃木曾殿の巻(続)

三

ひよどり越えの巻

一八三

千手の巻

三五九

装幀 N D C 原 弘

京乃木曾殿の巻（続）

秘園獸走ひえんじゆうそう

どこが冬姫のいる棟であろうか。

かなたの大屋根はいくつかに分かれ、泉殿の下の流れや築山の様も荒涼である。灯影もあらず、人の気配はまったくない。

——跳び越えた築土を背にして、義仲は、眼にとらえる何物もないむなしさ、寂寞さに、しばらく、茫としていた。

ここへはいってみるまでは、関白家の姫君の隠れ家、召使や、守りの武者もいるものと予測していたにちがいない。案に相違した面もちだった。

しかし、体じゅうの酒気も妄執も、たやすく醒め果てるはずはない。かえって眸には疑いと情火を加え、人のおいを嗅ぎ求める黒豹のごとく寝殿や対ノ屋の外をしきりにうろうろ歩きはじめた。

すると、すぐ——いま義仲が越えた所のおなじ築土

を、また後から躍り越えて来た男があった。男は、注意ぶかく身をかがめ、先の影を尾けて、突然、うしろから跳びかかるような姿勢をしめた。

うつともない義仲だったが、とたんに動物的な反射を四肢に見せて、

『だれだっ』

と一喝し、太刀の手へ腰のひねりをかけた。

『やや、あなた様は——』と男は、義仲と初めて知って、遠くへ飛び退き、ひざまずいて、

『おゆるしくださいまし。御大将とは、ゆめ思わず、あわや粗相つかまつるところでございました』

『関白家の召使か』

『いえいえ、てまへは、楯親忠殿に飼われておる雉色の猪丸で』

『なに？……おう、猪丸か。なんで、かような所に、ただひとり潜んでおりしぞ』

『おあるじの申さるるには、この姫君が、またもいつ他へ隠れ家をかえまいものでもない。夜屋なく、見張りいたせ。もし家更えをしたら、その行く先を見と

どけよとの、おいいつけによりまして』

『では、冬姫はまだここにおるな』

『されば、あの翌日、法住寺殿の方角に御合戦の煙りを見ると、この上の浄光妙院へ深くお籠りあって、そのまま、潜まっておられます』

『さては、ここには人も見ぬはずよ。その浄光妙院とやらは？』

『すぐかなた、御庭つづきの、小高い松林の上ですが』

『猪丸、そこへ案内いたせ』

『して、お供の武者方は』

『なに供人。そんな者は、こよいは連れておらぬ』

『あ、お忍びで』

猪丸は急にのみ込み顔をした。先に立って、庭はずれから小道を登って行き、松の木の間を指さした。

初めて、いくつかの灯があった。関白家の先代忠通が建立した三重ノ塔や御堂なのである。過ぐる日の戦い以来、姫に侍く女房や武士もみな一つに潜んでいたらしい。義仲が不意にやって来たことを、義仲に代つて、猪丸は車寄から大声で奥へどなった。

『やあ、御内なる人びと、突然なれど、これへ渡らせ給うたは、木曾の大殿ぞ。新將軍義仲公なるぞ。耳を疑うな。これへ出て、お迎え申せ』

二度三度、そう繰り返したが、しかし、義仲は家人の応接などを待っているつもりはない。かれの姿は、もうずかずか内へはいって行き、

『姫君はどこにおられる。冬姫どのに会いに来た』

問いつつ、見まわしつつ、廊や細殿の物陰をうろたえまわる召使の影を払って、なお奥の方へ、ぐんぐんと通って行った。

御堂づくりだけに、屋鳴は大きく聞こえ、人の叫びやら聲音など、不気味に響き合った。

木曾、という声だけで、それまでの静寂がこの有様だった。朱雀のちまたへ、鬼が出たような恐怖のあらしである。

——と、中の廻廊を、一団になって、こちへ渡つて来た人びとがある。みな、侍たちであり、長柄や弓

を横ざまにかい込んだ挑戦的な者もあって、

『やあ、待て、待ちおろう』

と、義仲のゆくてを立ちふさいだ。

『どこの者かは知らぬが、人の家へ押し通って、何を求めに参りしぞ。木曾將軍の名を騙るなど烏滸がましい。おそらく、賊徒であろうが』

『よく人を見てこそ、ものをいえ。おれを知らぬか』

『賊の顔など、だれが見知ろう。こやつ、胆に毛が生えたような面して、びくとも動じおらぬぞ』

『やかましい』

と義仲は、しかりつけて、

『なんじら、雑色輩に用のある身ではない。おれは、まぎれない木曾ぞ、後で悔いるな』

『木曾のなにやつかよ』

『しゃつ、都にいて、この義仲を知らざるか』

『あはははは』

虚勢だが、どよめき笑って、

『いかに、山家出の義仲冠者として、夜陰、供も連れず、かかる所へただひとりで来るはずはない。尾を垂れて

帰ればよし、なお、こけ脅しを申しおると、ただは措かぬぞ』

後ろの方で二、三の弓は、矢つがえを示し、前なる者は、長柄をしごいて、斜めに持ち直した。

いかに酒氣があつたにしろ、それにたいしての義仲は、ずいぶん無謀な仕方だった。柱の陰へ身を交わすでもなく、体そのままを、数歩、かれらの前へ持つて行つて、いきなり平手でひとりの横顔を撲りたおしたのである。

これはかれが、木曾の山犬峠などで、狼に囲まれたときの経験そのままやったものかもしれない。素手で寄つて行つたため、相手の同勢は、かえて戸惑いしたらしく見える。撲りたおされた仲間が横へよろめくのを見ていながら、なんの手出しもしなかった。いや義仲の威に圧されてできなかったものらしい。

『木曾といえばおれ、おれといえば木曾、天下に義仲はふたりとおらぬ。そのおれは、当閨白家の婿でもあるぞ。なんじら、あるじの婿君に、弓を引く気か。その面どもの一つ一つをよう見ておくゆえ、後になつて

泣き吠ゆるなよ』

義仲は、ねっとりといったが、もとよりかれらの耳に、受け容れられる言ではない。また一せいに喚き始め、矢はそれだが、ぶんと、後ろで弦鳴も起こった。

ところへ、義仲の後から駆け出して来た猪丸が「まぎれない御方なるぞ、ばかなまねをするな、後悔するな」と大声で関白家の侍たちを制した。

この猪丸は、もと、関白家に仕えていた雑色のひとりであったから、当然、そこにいた人びとは、以前の朋輩なのであった。その猪丸が、近ごろは木曾幕下の榎親忠の配下にいるということもみな知っていたので、

『やや、猪丸がああ申すぞ』

『では、義仲公とは、まことなるか』

にわかに、仰天したのである。

弓も投げ、長柄も下において、

『いかなれば、この夜陰に、かくは突然、お渡りなされましたか』

と、平あやまりに詫びつつ訊ねた。

義仲は、狩衣の下から、禅閣基房にしたためさせた一札を取り出して、読み聞かせ、

『わかったか。いま読み聞かせたは、関白殿の婿誓文ぞ。余人ならぬ姫の父君が、この義仲へ、こう、ゆるしておることなのだ』

『……』

『すなわち、婿の義仲が、こよい自身で姫の身をお願い受けに来た。姫君はどこにおらるるぞ』

『……あ、もし』と、義仲の語気と眸を、自分の方へ引き取って、中でも年とった家職らしい者が、毅然として、答えた。

『おあるじの禅閣様の御筆、みじん、お疑いも仕りませぬ。また、仰せの旨も、よく分かりまして御座ります。けれど、姫君には、もうここにはおいで遊ばしませぬ。はい。まことに、せつかな儀ではおざりますが』

『なに、おらぬと、では、どこへ移した』

『さる御寺の内へ』

『寺と申せば、これも寺だが』

『いえいえ、秋のころより、世は恐ろしき苦患のつじのひと、いたく世をお厭いあつて、藤原氏の有縁とて、奈良に近いある御寺へはいられました』

『うそをいえ。……どうだ猪丸、いまのことばは、嘘であらうが』

『大嘘でございます。ここへ潜み給うたのも、たしかに見とどけ、その後、この猪丸が昼夜見張つておりましたが、冬姫の君が、ほかへ移つた様子はございませぬ』

『そうだろう。奈良といえ、義仲の力も届きえまいと、その老家司めが、機転で申すことにちがいない』

『なんの、まったくもつて』

『まだいい張るわ、この、しぶとい家司めは』

『おわさぬものは、いかにとも』

『よし、さらば家探しいたすぞ。それでもか』

『御存分に』

『猪丸』

『は』

『広くもあらぬ御堂や僧房、限なくそこら中、捜して

みろ』

義仲もまた、一間一間の御簾を引きちぎり、几帳を蹴たおし、壁代をめくり、妻戸から妻戸へと、かれとともに捜して行つた。

よい香料の香のただよう部屋があり、美しい女房衣を掛けた衣桁があり、鏡台、調度のたぐいも見える。

「いる。いないはずはない」という疑いは増すばかりだった。そして、そういう雑兵的な行為そのものに、義仲の野性は野を行くように翼をひろげ、かれ自身が自身のしていることを知らないような姿だった。

けれど、ようやく、徒労がわかった。

捜しあぐねた猪丸は、もう、下屋から釜屋までも見、なお床下をのぞいた末、外で考えこんでいた。

そのうちに、かれの眼が、一つの不審を、かなたに見つけていた。

淨光妙院から数十歩の西側に、三重ノ塔があつた。

その塔の一層目なのである。かすかに、すき間もる灯が見えたのだった。

義仲は西の廻廊へ出、猪丸とともに見ていたが、

『おう、あれか。——さてはかしこよ。あのような所に、冬姫のほか、だれが隠れ住むものか。見つけたわ、姫は、あのうちだ』

その欄を飛び降りざま、目標へむかつて、餌物にかかる野獣のように走った。

猪丸も、おくれはしない。

けれどその猪丸は、十歩とも駆けないうちに、どこからか飛んできた矢に喉笛のどぶえを射抜かれて、ぎゃっと、みじかい叫びをあげ、もう、芋虫のように、地上に身をもがき丸めていた。

冬の花

うしろの、猪丸の絶叫にさえ、義仲は気づいていない。

幾すじかの矢は、義仲の影をも、掠さらめていた。

そして、その姿は、もう塔の階きざはしのすぐ間近に迫った。「姫っ」とかれの心がさけんでいる。

灯影は、いつのまにか、かき消されており、二層目、三層目、塔頂の水煙すいえんまでも、すべて、墨一色のものだった。

しかるに、塔の室をめぐる四方の廊には、掛仏かけぶつの像のように、具足、腹巻の人影が立ち並んでいたのである。義仲は、反射的に、跳び退いた。

関白家の臣、河内かわち介安成、非蔵人貞正、春日四郎、弟の菊王などだった。これらの子飼からの郎従十数名は、一命に代えても、冬姫の身を守ろうものと、桂川へ移ったときから、そばに仕えていたのであった。

わけて、法住寺殿の兵麥以来は、いつ、木曾殿の魔手がさし伸ばされて来るかも知れぬと覚悟していたし、今も、「たとえ、義仲自身たりとて、なんでむざと、姫君のおん身を渡そうや」と、おのおの肉陣で守り堅めていたものだった。

さすが義仲も、ぞっとした。内に燃える妄執もうしやくと、近づき難い決死の群像に阻とどまれて、じんと、髪かみの根が熱くなった。「いかがはせん？」と、後ろを見るのだった。後ろにはまた、さっきの剛毅ごうぎな老家司以下、雑色

たちが、打物をおつ取って、

(これ以上の乱暴をなすならば、木曾殿とて、ゆるしはせぬ)

と、関白家の運命をも、賭ける覚悟でいるらしく見える。

おりもおり、そのころだった。四方に人馬の音が近づきつつあった。五条を出るとき、義仲を追っかけた郎党のひとりが、さらにそれを楯親忠へ、告げていた。「さてこそ、桂川へ行かれたものにちがいないぞ」と、親忠を先頭に、探しあてて来たものらしい。

『あれよ、かしこに人影が』

『ひとり、わが君』

見つけるやいな、親忠の部下たちは、ぶんぶんと、弓鳴を争った。矢かぜは、塔を中心に無数の矢を突き立てた。

塔を囲んでいた決死の群像も、あえなく、ばたばたとたおれて行った。もうその側まで、木曾方の騎馬は躍っていたのである。あなたこなたで白刃のひびきがし、組み合う武者と武者もあった。かの剛毅な家司は、

まっ先に斬り死にし、あとの雑色は、ほとんど、戦わずに逃げ散った。

『わが君、わが君。親忠でおざる。親忠、駆けつけて候うなり。——おういつ、味方の者ども、もう、敵らしい敵はおるまい、さは追うな。それよりも、わが君を、おたずね申せ、わが君を』

親忠は、塔の周りを、ぐるぐる馬で駆けまわった。林のうちへもはいつて行った。どうしたのか、義仲は見えもしない。

もしや、と不吉な想像もして、そこの死骸も調べさせた。が、手負いや死者は、関白家の者ばかりである。義仲はその中にも見あたらなかった。

義仲は、塔の中に、いたのである。

矢つむじの一瞬に、扉をつき破って内へ駆けこみ、漆塗のようなそのやみを、体じゅうで、じっと、さぐっていた。

十二月の外気にひきかえ、塔の中は、生あたたかい。

人はだほどなたたかきである。

伽羅きやらの香か、蘭麝らんじやの香か、えならぬ匂においが鼻をついてくる。それにも女性の特有な体臭とぬくみが加わっているの、むせるばかりなここちがする。

『姫ぎみ……』

義仲は、そうと、下へすわって、しかも努めて、優しくいった。

かれは、ふるえていた。どうしようもなく、ふるえが出る。

余りに高貴な君と思うばかりではない。ひょっとしたら、自害しているかもしれない予感がするのだった。また、自分の闖入ちんにゅうにおそれて、こうしているまにも、死にはしまいか。無残な亡き骸むくろのみが、そこにあるのではないかと、齒の根で思いしめるのであった。

『……姫ぎみ』

間を措おいて、またいつてみた。依然として、答えはない、物音もない。

『なにも、こわいことはありません。……お父君基房公の御書面をもって参り申した。お明りをおつけくだ

さい』

お父君の——とかがいったとたんに、すみの方で、泣きむせぶ声がした。その泣き声のうるわしさ。義仲は、わくわくした。

『決して、決して、御不幸な目には遭わしませぬ。万一にも、姫君がお気みじかな真似でもなされたら、それこそ、基房公の御不幸は、はかり知れまい……。さ、御書面を御覧ぜられい』

『……………』

『ここには、姫ぎみおひとりではおざるまい。侍かしずく女房も、そばにおろうに……。なぜ明りをお点ともしなさらぬか。お父君も、案じておわす。一刻もはやく、ことの始末をおこたえしてあげたいとも思う』

『あ、あなたは……？』

姫か、侍女か、糸のような声だが、やっとそう答えて来た。

『いや、お明りを、ともせば分かる。御書面を御覧あれば、なお分かり申す』

しきりに、燧石ひうちいしを打つ音が聞こえ、細かい火花が、

やがて灯皿に小さい灯の虹を咲かせた。

見れば、塔の中は、絵屏風にかこまれ、几帳から調度類まで、貴女の室そのままだった。五衣のそでを打ち被いて、泣き伏している君こそ、冬姫にちがいあるまい。義仲は、眼もくらむこちで、その人の黛を、想像しぬいた。

そばには、ふたりの小女房が、ともに、たもとで顔をおおって、泣いている。

このどっちかひとりか、かつて、関白家の客となつて行つたとき、姫の替玉となつて、琴を弾いた女であらう。こう並べて見れば、髪衣装のみではなく、品位といい、姿といい、姫とは、較ぶべくもない。

外の親忠や、郎党たちが、義仲をさがしていたのは、かれが、こうしていた間だった。

しかし、そこに灯影がさすと、かれらもすぐ気づいた。それでも、なお何か、塔を繞つて、いいさわいでいたが、やがて馬を降りた親忠が、階を上つてゆき、扉を押しあけ、ぬっと、内をのぞきこんだ。

『おう、わが君には、ここにおいでなされましたか。』

親忠にござりまする。なぜ、それがしには、あのようにお秘しあつて、ただおひとり、危い中へ』

いいかけるうちに、義仲が、

『そこ開けるな、ばか者、だれが呼んだか。ひっ込んでおれ、ひっ込んで』
と、どなりつけた。

——その大声に恐怖したのか、親忠が顔を出したの
で驚いたのか、義仲は、冬姫の横顔に白い戦慄をふと
見た気がした。しかし、その美しさに射られたと思つ
たときは、姫はまた五衣の下に顔を埋めていた。

『いざ、義仲とともに』

義仲は、ふいに、飛びかかった。

そして、かの女の体を、横ざまに抱え上げると、ひ
いーつ、と姫の唇から悲鳴が走つた。かれはかの女が、
自分を義仲と知つたためだろうか、かなしく思つた。

『親忠、馬をひけつ。馬だ、馬だ』

肩さきで、扉を押し開き、外へおどり出たものの、
かれは横わきに抱えたものを、ほとんど、持て余しそ
うにしていた。

冬姫は、いくどとなく、死ぬばかりな悲鳴をあげ、その冷ややかな黒髪で、かれの顔をも腕をも乱れ打った。

親忠は、あわてて、義仲に手を貸した。そして、

『おまかせなされませ。それがしが、馬上に引つ抱えて参りますれば』

抱き取ろうとすると、

『いらざることを』

義仲は、舌打ちした。まるで蹴放さんばかりである。

かれの手を振りほどくやいな、冬姫を抱えたまま、馬の鞍へ、よじ上った。

見ているほかはない。

親忠も、郎党たちも、あつ氣にとられた顔を並べてしまった。義仲の眼には、それもない。かれは、姫のからだをいたわりながら、鞍の前輪とひざのあいだに抱いて、

『姫よ、何もこわいことはないぞ。わずかな間だ、こらえておれよ』

と、浄光妙院の横坂を駆け降ろし、やがて、洛中の方

へ、飛ぶ星のごとく急いでいた。まるで市原野の土蜘蛛かなんぞのような仕業であった。

梅小路近くに、閑雅な小館が、焼け残っている。元は八条女院の御別邸であったとか。

かねて義仲は、ここもおりおり、使っていた。

葵が病を療治しているには、静かでよからうと、思ったからである。——が、葵は拒んで、どうしても、義仲のそばを離れようとはしない。そのため、空き館のかたちだった。

義仲は、冬姫の身を、ここへおいた。というよりも、閉じこめた。そしてかの女の泣きたいかぎり泣くにかせた。

『この一札をよく見たがよい。基房公のこのお筆を。』

——姫の身は義仲に賜わるとの嬉雪文だ。義仲は、乱暴もせぬ、欺きもせぬ。ただ、初めからの約束を、約束のとおり履んだまでのこと』

しかし、冬姫は、信じない容子であった。